

コミュニケーション能力を高める外国語活動の実際 —外国語活動と外国語科との円滑な接続をめざした小小連携プログラムの在り方—

中村 理恵

コミュニケーション能力の育成をめざし外国語活動が小学校で必修化となって、2年目が過ぎようとしている。今後、外国語教育として、小学校の学びを中学校外国語科とどのように接続していくかが大きな課題となっている。そこで、本研究では小中学校の連携を推進するために、一つの中学校区にある複数の小学校同士の「小小連携」を充実させていくことが有効であると考えた。複数の小学校が連携し情報交換を行いながら共通の取組を進めていくことで、同じ中学校へ進学する児童の経験をつなぐとともに、コミュニケーションを図る楽しさやよさに気づき、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をめざし、その在り方を「小小連携プログラム」として提示した。

第1章 小学校における外国語活動とは

第1節 外国語活動必修化までの歩み

日本の小学校英語の歴史は古く、明治時代に既に教科として実施していたこともある。当時、英語は新しい知識や技術を得る手段であった。しかし、グローバル化した現代では、外国語や外国語教育がもつ役割は変化してきている。

昭和61年に英語教育の開始時期の変更が示唆され、平成10年には「総合的な学習の時間」における小学校英語活動が可能となった。その後、小学校英語活動は徐々に広がり、平成19年度には全国の97.1%の小学校で英語活動が行われるまでになった。そして、平成23年度の第5・6学年を対象にした外国語活動の必修化へと至ったのである。

本市においては、平成6年度より小学校英語活動の教育実践研究を開始し、その成果を発信してきた。併せて、学校指導課や研究会を中心に、小学校英語活動を支える条件整備が行われてきた。将来、国際社会を生きる子どもたちが互いを認め合い協力していくため、円滑なコミュニケーションのための態度や力の育成が求められている。小学校において外国語活動と出合うことが、子どもたちの将来の可能性を広げるものとなるのである。

第2節 小学校に求められる外国語活動

外国語活動で、児童は英語を使ったコミュニケーション活動を行う。使い慣れない外国語を用いることによって、言語だけに頼らないコミュニケーションスキルについて学び、様々な手段を使って互いに理解し合うことの楽しさやよさを実感する。児童の「人と関わろうとする気持ち・意欲・態度」を育て、人と積極的に関わっていくための土台づくりをするのである。

一方で、外国語活動に関する課題も出てきてい

る。教員の英語力や指導力、校内研修の在り方、評価の在り方などである。中でも、小中連携に関する課題は、今後の外国語教育全体を考えたとき、特に注視すべき課題である。

第2章 なぜ、いま、小小連携が必要か

第1節 小中連携の重要性とその現状

小学校外国語活動が外国語教育として中・高等学校と接続されていることは、3校種の学習指導要領にある目標を比較することでわかる。小学校における音声を中心としたコミュニケーション活動の体験を活かして、どのように中学校へ接続していくかが重要である。そのためには、小中学校が互いの指導や学習内容を十分理解し、連携していくことが望まれる。しかし、小中連携の重要性は理解されながらも、その取組は十分進んでいるとはいえない現状がある。また、学校によって、外国語活動に対する児童の実態にも違いが見られる。その解決に向けた方策が必要である。

第2節 小中連携を促進する小小連携プログラム

本研究では、小中連携を推進するために、一つの中学校区に位置する複数の小学校同士の連携をより充実させることが有効であると考えた。各校の特色や児童の実態が異なっても、複数の小学校が情報交換しながら共通の取組を実施し、それを基に中学校と連携を深めていくことができると考える。小小連携プログラムの視点として、「つなぐ」をキーワードに次の5点で複数の小学校間における取組を行う。

- ①年間指導計画をつなぐ
- ②共通単元をつなぐ
- ③授業をつなぐ
- ④指導をつなぐ
- ⑤評価をつなぐ

第3章 小小連携を意識した外国語活動の実際

第1節 第5学年 “Hi, friends!1” Lesson 5 「テレビ会議システムを活用する」

本単元では、テレビ会議システムを活用し、離れた2校の授業をつないだ。テレビ会議は、音声や映像に若干の時間的なずれが生じる。そのような条件下であっても、なんとか相手に自分の思いが伝わるように工夫する担任の姿を、初めにモデルとして児童に示した。そうすることで、児童は言語だけではなく様々な手段を使ってコミュニケーションを図ることの大切さに気付き、学級の友だちとインタビューをする場面でも、相手の反応を見ながら工夫して活動した。更に、インタビュー



図-1 インタビュー結果を交流する様子

の結果を隣の学校と交流する場面でも、相手校の児童が理解しやすいように、ゆっくりと話したり Web カメラにシートを示したりする姿が見られた(図-1)。

第2節 第6学年 “Hi, friends!2” Lesson 3 「チーム・ティーチングを活用する」

協力校の第6学年の外国語活動の授業には、中学校の教員が関わっている。そこで、担任が T1、中学校教員が T2 となり、役割分担を明確にしてそれぞれのよさを活かした授業づくりを行った。児童をよく知る T1 が児童の反応の様子を見取りながら授業を進め、T2 が T1 には難しい音声や英語にまつわる興味深い話などを提供した。また、複数の学級の授業に関わる中学校教員が、先行して行った授業を活かし、もう一方の学校では時間や内容を調整して、より円滑に授業が進行するように工夫することができた。

更に2名の指導者が机間指導を行うことで、より多くの児童の活動の様子を見取り、個別に支援をすることができた。そのため、慣れ親しんできた表現や語彙を使って、自信をもって活動に取り組もうとする児童の姿が見られた。

第3節 第6学年 “Hi, friends!2” Lesson 5 「隣接する小学校と合同授業を行う」

テレビ会議システムを活用し、複数の小学校の外国語授業をつなぐことによって、児童は日常的に交流がない相手と英語でやり取りをする楽しさや満足感を得た。そこで、2回目の共通単元では、終末のコミュニケーション活動を児童が直接対面して行った。毎日、学校生活を過ごす友だちとは

異なり、児童は初めて言葉を交わす相手に自分の伝えたいことを理解してもらえるように、コミュニケーションを工夫する必要がある。児童は自分のおすすめの国のよさを伝えるために、相手を意識してはきはきと話すようにしたり、聞き手の反応を見ながら話したり



図-2 おすすめの国を紹介する様子

することを心がけていた(図-2)。初めは互いに緊張した様子が見られたが、活動が進むにつれて児童の活動も円滑になり、授業の雰囲気もほぐれていった。早く紹介

が終わったグループの中には、和やかに話をしたり握手をし合ったりする姿もあった。授業の振り返りでは「〇〇小の人の国の紹介はわかりやすかった。」「選んだ国や行きたいところがちがったから楽しかったです。」など、互いのよさや違いを実感し認め合って交流する児童の姿が見られた。

第4章 小小連携から小中連携へ

第1節 実践を通してみえてきた成果と課題

児童の外国語活動に対する意識を、実践前後に行った調査で比較した。その結果、外国語活動が「好き」「まあまあ好き」と回答した割合が第5学年では84%から95%、第6学年では88%から94%へと増加した。また、指導者の変容として、クラスルーム・イングリッシュの使用の増加や、複数の小学校で情報交換を行うことにより、それぞれの授業の工夫と改善ができたことが挙げられる。

今後、より充実した小小連携プログラムをめざすためには、次の四つの課題が挙げられる。

- ①外国語活動における「めざす子ども像」の共有
- ②綿密な年間指導計画作成と日程調整
- ③ALT とのチーム・ティーチング
- ④外国語活動の評価の在り方

第2節 コミュニケーション能力の育成をめざして

今後も、小小連携の取組をますます充実させ、どのように中学校とつないでいくかを考える必要がある。小学校と中学校がそれぞれの教育を互いに補完し、長期に渡って子どもたちの学習を支えていくことが望まれる。そのためには、管理職を核にした連携体制を整える教育委員会によるシステムづくりや、教員の意識改革とともに外国語活動の研修内容を更に充実していくことが重要である。